

山陰の「小さな文化」を楽しむ

ひだまりのおと

第4号 2022

特集：「あゆむ」





いまみや工房（松江市）

本誌『ひだまりのおと』は、島根県立大学短期大学部総合文化学科の授業「文化情報誌制作」の成果物です。
特集ワードからそれぞれの発想で取材先を決め、写真撮影、記事執筆、誌面レイアウトまで、学生が行っています。

目次

巻頭（寄稿）

岸本 強（島根県立大学松江キャンパス副学長） 松江キャンパスもう一つの「あゆみ」 1

特集 「あゆむ」

小泉八雲と共にあゆむ、塩見縄手（松江市） 2

等身大にあゆむ（安来市） 8

夫婦で営む工房（松江市） 14

懐かしさ × 新しさ（米子市） 20

青ネギと、八雲と、家族と。（松江市） 26

「幸せの循環」（安来市） 32

ともに歩む（松江市） 38

国境を越えた歩み ～国際交流員の思い～（松江市） 44

日本に上陸した巨人 ～美味しいシチューと共に～（松江市） 48

編集後記（裏表紙裏）

表紙題字 篠村優花（総合文化学科卒業生）

松江キャンパスもう一つの「あゆみ」

島根県立大学松江キャンパス 副学長 岸本 強

「松江キャンパスは瀟洒しょうしやで素敵すてきな大学ですね」とよく耳にします。嬉しいことです。道路を挟んで隣接する運動公園緑地を借景にした本学の紹介写真は本当に素敵で、自画自賛したい一枚です。

レンガ色の学舎が引き立てられているのは、学内の木々や植栽が一翼を担っていることを強調しておかなければならないでしょう。ここでは「キャンパスを彩る植物」を中心に、松江キャンパスの「あゆみ」について書くことにします。

10月になるとキャンパス内に甘い香りが広く漂います。一年間じっと存在を潜めていた金木犀が、橙黄色の花とともに強い香りを放ち、一気に存在感を誇示します。私は金木犀が大好きですが、中でもキャンパス1号館横の金木犀には特別な思いがあり、毎年、樹勢や花の付き具合を気に掛けています。

松江キャンパスは、1985年に浜乃木から現地の上乃木に新築移転しました。それから34年が経ちます。移転の際、浜乃木校舎敷地の樹木を上乃木校舎へ移植するための選定作業が学内小委員会によって行われました。選ばれた木の

一本がこの金木犀なのです。移転前の浜乃木校舎は元島根農科

大学の建物で、廊下や階段を歩くと「ギシギシ」音がするほど古い木造の校舎でしたが、歴史があるだけに敷地内には巨木から低中樹木も豊富にありました。私が使用していた体育研究室の窓際には白イチジクの木があり、時季になると教職員が競って食したのも懐かしい思い出です。木造平屋の狭い講堂（兼、体育館）と渡り廊下でつながった棟（体育研究室があった）との間に立っていたのが選定移植された金木犀なのですから想いもひとしおです。樹齢は不明ですが、一年に一度甘い香りを放ち、浜乃木でも上乃木でも、学生・教職員に安らぎや潤いを与え見守り続けてくれていて、本学の歴史には欠かせない重要な木なのです。キャンパス内の様々な木々・植栽のうち、浜乃木からの移植組は、図書館裏手の山に沿って立つ複数本の八重桜、学生寮（紅梅寮）の紅梅が主なものでしょうか。

正門から1号館までのメイン・ストリートに新たに植えられたのがアメリカハナミズキです。春には数種類の高貴な鮮やかな花でキャンパスを彩り飾ってくれます。遠くから観る花も綺麗ですが、間近で見ると花弁は気品に溢れていて感動すら覚えます。秋には紅葉し12月には落葉する、四季の移ろいを感じさせてくれる松江キャンパスの正にシンボル・

ツリーです。高価な木ですが、近年、樹皮に苔が生じたり、樹勢が衰えたようで心配しています。2号館エレベーター設置の際に、一番大きく立派なアメリカハナミズキの木を2本も伐採せざるを得なかったことは痛恨の極みです。この他、移転後に植えられたのは2号館横の常緑の白樫（新図書館が建つまでは寮までの道路沿いに一定間隔で植樹されていた）、テニスコートを囲む山茶花、音楽棟下側の壁面を彩るツツジとサツキ、正門から自転車置き場にかけてのツツジ、タマツゲが主なものです。グラウンド（学生駐車場）周りのカイヅカイブキは管理不十分で生け垣には程遠く伸び放題です。

名誉教授有志が学舎移転記念に植樹された、中庭のコウヤマキも忘れてはいけません。その側の屋根付き通路沿いには、春には小粒で白い可愛らしい花を咲かせ、晩秋には小さな葉が真っ赤に染まるドウダンツツジもありますね。

キャンパスフォーラムや、管理棟玄関を飾るプランターの花々も私たちが和ませてくれています。これらは後援会の支援によって設置され、事務職員の管理の下、四季の花を愛でることが出来ます。

裏山となる山林や木立にもふれておきます。この裏山は「奥山横穴群」の名のついた遺跡であることをご存じでしたか。造成の際には「鉄製太刀」も発掘さ

れています。狭小な敷地ですのでここを造成して拡張できればキャンパスも広くなるのですが、敷地内遺跡は自費発掘が求められるので手が付けられず、現状保存のため裏山として存在しています。移転した頃は赤松が生い茂っていたので教職員が松茸探しに散策したものです（見つけた話はありません）。その後は、基礎科目「生物」等の授業で植物観察に利用するために散策道の整備や木々に種名を掛けるなど活用していた時期もありました。現在は上り下りのための土留階段が崩れ、入山しにくい状態です。何とか整備をしておかなければと思いつつ、手つかずのままです。遺跡の裏山もキャンパス景観には欠くことはできません。

この様に、木々・植栽は四季毎に様々な表情を見せながらキャンパスを彩り、生活に潤いを与え、人を和ませ癒す素晴らしい役割を果たしてくれています。

大学の改編・拡充にともない伐採されるものや、新たに植樹・植栽されるものもあり、統一感があるとは言い難いのですが、松江キャンパスの歴史が刻まれる中で「キャンパスを彩る植物」は、そこで過ごし巣立つ学生・教職員には欠かせない環境の一部でありましたし、これからもそうあり続けることでしょう。（いよいよ私も巣立ちの時を迎えました）おわり。



舎は元島根農科

か。造成の際には「鉄製太刀」も発掘さ

特集 「あゆむ」

小泉八雲と共にあゆむ、

塩見縄手（松江市）

佐々木陽平

「ひだまりのおと」第4号の特集テーマは「あゆむ」です。塩見縄手は松江市で最も江戸時代の面影が残り、歴史ある建物が連なる一本道です。今回は、塩見縄手に属する施設の中でも小泉八雲が暮らした旧居、武家屋敷に行き、取材を行いました。

小泉八雲記念館



塩見繩手は松江市の小泉八雲記念館前

から明々庵入口までの約500mの一本道です。「繩手」とは縄のように一筋に伸びた道路のことを指します。塩見繩手は江戸時代、600石から1000石取りの中老格の藩士の屋敷が並んでいたところで、塩見繩手の名称はこのほぼ中央に、松江藩中老の塩見小兵衛の屋敷があったことに由来しています。

その昔、塩見繩手は「城見繩手」とも呼ばれていました。現在では松江城の堀川沿いに木が生い茂り、繩手から城は見えませんが、昔は木が低く、繩手から城が見えたため城見繩手と呼ばれていた時期もありました。

小泉八雲と塩見繩手

最初に訪れたのは、塩見繩手の西端にある小泉八雲記念館。ここで小泉八雲記念館学芸スタッフの田根さんに、小泉八雲、旧居、そして武家屋敷についてお話を聞かせていただきました。

まず、なぜ八雲は松江での住まいに現在の旧居を選んだのかをお聞きしました。八雲は家選びの際、お庭がある侍の屋敷に住みたいと考えていたそうです。そんなときちょうど八雲の教え子である根岸さんという方が転勤で家を離れたため、そこに八雲が住むことになりました。八雲は元々、塩見繩手に住みたくて住んだわけではなく、条件を満たしたお家が塩見繩手に属していたということだそうです。

次に八雲の作品と旧居についてのお話をさせていただきました。八雲の書籍『知られぬ日本の面影』の中に「日本の庭」という作品があります。そこで八雲は自身が住んだ家についてとても詳しく書いていたそう。そして実際に作品に登場するお庭、部屋がそのまま残っているのが現在の旧居になるそうです。筆者自身作品を読む前に旧居に足を運びましたが、作品を読んでから旧居に足を運ぶと、作品に登場する舞台をそのまま見ることができるので、ぜひ作品を読んでから旧居を訪れることをおすすめします。

さらに、この旧居は国指定の「史跡」

に指定されており、歴史的、学術的にも価値が高い施設となっています。

日本国内で「国際文化観光都市」に指定されている3つの都市の一つに、松江市が含まれています。その理由にも小泉八雲が関わっていました。小泉八雲が文筆により松江を世界に紹介し、広く知られたことで国際文化観光都市に指定されたそうです。日本全国のことでも知ることが難しい明治時代に、外国人である八雲が自身の書籍『知られぬ日本の面影』によって、世界的に松江が知られるきっかけを作ったことがとても大きな成果だと田根さんはおっしゃいます。筆者自身、小泉八雲は怪談のイメージしかありませんでした。しかし、お話を聞いているうちに、松江市、さらには島根県に多大なる貢献をしたすごい方だと再認識することが出来ました。

ここで、田根さんが興味深いお話をしてくださいました。見せていただいたのは、江戸時代の松江城周辺の地図と現代の松江城周辺の地図です。見比べると、道路の配置などがほぼ同じなのです。戦時中、この辺りは空襲の被害がなかったそう。そのため、歴史ある建物がそのまま残っているのです。また、松江市は細い道や一方通行の道が多く、車では走りづらいと感じるのも当時の道が残っている証拠だとおっしゃいました。塩見繩手がどちらの地図を見ても同じ位置にあることにとっても感動しました。塩見繩手は建物だけでなく道の配置や細さからも歴史を感じることができるとも価値あるものだと再発見することができました。



『知られぬ日本の面影』の書籍

ここでスペシャルゲスト!

記念館で田根さんのお話を聞いているとサプライズゲストで小泉凡先生がお越しになりました。凡先生は小泉八雲の曾孫にあたり、小泉八雲記念館の館長をしてられます。そこで、特別に凡先生に色々なお話をさせていただきました。

八雲が実際に使用した品など様々なものが展示されている中、筆者が注目したのはとても背の高い机です。八雲は片目が見えず、さらにもう片方の目も視力は0.1ほどで、ほぼ目が見えなかったそう。八雲は本を執筆する際、この机に座り顔を机上につけるようにして書いていたそうです。身長157cmほどの八雲には高すぎるぐらいの机ですが、それが八雲にとっては座り心地の良い机だったようです。

さらに、当時の煙管も展示されていて、八雲がこれを使い、高い机に座って執筆する姿を鮮明に想像することができました。



八雲の机(実物)



八雲の煙管



小泉凡先生(左)と筆者(右)

実際に旧居へ

ここからは実際に小泉八雲旧居に行き、そこでお話をお聞きしました。現在公開されているのは旧居全体の半分で、三方のお庭とお部屋を見ることができません。

実際に旧居に入って最初に目に飛び込んできたのは、見るものを魅了するとてもきれいな南側のお庭でした。庭全体が枯山水になっており、奥に海を表すしゃちほこ、手前に川を表す白い砂が配置され、これが海に流れる川を表現しているそうです。普通の日本庭園とは一風変わったもので筆者自身どこに目を向けても楽しいものでした。

次に紹介してくださったのは、明治時代の手吹きガラスでできた窓です。よく見てみると、空洞があったり、波打っていたりします。日本でガラス製造が始まった頃の貴重なものだそうです。現代の技術で作られたガラスとは違い、少しモヤモヤしているところも歴史を感じます。



さらに奥に進むと、築山というお庭が見えてきます。先ほど見たお庭と違い、苔、石、木がメインになっています。このお庭が一番武家屋敷っぽいお庭だと思う。普通の武家屋敷にある木は縁起担ぎのために葉の落ちない常緑樹が植えられるそうですが、ここは明治時代に当主がお庭造りの際に様々な木を植えられたそうです。また八雲もこのお庭を見ています。

ここで、田根さんが八雲が一番好きだった景色を見ることが出来る地点へ案内してくださいました。そこから見る景色は、今まで見てきたお庭や窓ガラスすべてが見渡せるものでした。部分部分で見えていたものが一つにつながって見えるので、より趣を感じることができました。



少し進むと次は八雲の書斎になりま
す。ここからは主に北側のお庭を見るこ
とができます。この庭では「水」がメイ
ンになっています。八雲の書籍『知られ
ぬ日本の面影』には生き物のことも詳し
く書かれているそう。今でも春や夏にな
るとカエルの大合唱を旧居で聞くことが
できるそうです。八雲が四季を感じた場
所で同じように四季を味わえるのはとて
も貴重な体験だと取材をして感じてま
した。さらに、田根さんは「春は花がた
くさん咲いて、夏は気持ちのいい風が旧
居の中を通過して、冬は寒いけど雪が降っ
た景色を手吹きガラスの窓から見るとと
ても綺麗。ぜひ四季を通して旧居を見て
ほしい」とおっしゃっていました。

ここで、先ほど記念館で見た背の高い
机といすのレプリカがありました。レプ
リカではありますが、同じ材質、寸法で
作ってあるそうです。今回は特別に座ら
せていただきました。座った感想は、想
像以上に顔と机上が近かったです。目が
あまりよくない方がこの机で読み書きを
すると、普通の机よりは楽なのかなと考
えました。

また、お庭には様々な木が植えられて
います。八雲はなぜその木が植えられて
いるのかまで本に事細かに記していたそ
うです。

八雲は目がほとんど見えない代わりに

五感を研ぎ澄ませて生活していたそう。
においにも敏感で、トイレに行くときは
煙管を吸ってにおいを紛らわしていたそ
うです。五感で感じながら生活する中で
様々な工夫をして生活していたことが取
材を通してわかりました。

旧居の説明の中で田根さんは、「松江
市民は小泉八雲を知っているから旧居な
どを見に来ない」とのこと。「実際に見
てみないとわからないこともある。ぜひ
見に来てほしい」とおっしゃってしまし
た。筆者自身、初めて旧居を訪れました
が、説明を聞くだけで、実際に足を運ん
で五感で感じてみるのでは大きな違い
があることを実感しました。



八雲の書斎



八雲の机のレプリカに特別に座らせて頂きました

塩見縄手を歩いてみる

旧居を後にして、ここからは実際に塩
見縄手を歩いてみました。旧居を出て道
路を渡ってすぐのところに小泉八雲の像
が立っています。そしてそこから縄手を
歩いてみると、歴史を感じる塀が連なっ
ています。中の建物は変わっていますが、
塀は当時のものが保存されているそう
です。また、縄手全体を通してわかるこ
とは歩道が狭いことです。観光客の方には
少し不便かもしれませんが、これも縄手
の特徴である道の細さを失わないよう
にするためだそうです。

また、道の途中に道路に出張った松
の木があります。これも、地元の方々が
当時のものを保存するためにそのままに
しているとのこと。縄手を通して塀や松
の木が当時のまま残っていて、そこを小
泉八雲が歩いていたことを考えると、旧
居と同じように歴史を感じ、五感が研ぎ
澄まされたような感覚になりました。



そして武家屋敷へ

塩見縄手を歩いて、次にやってきたのは武家屋敷です。昔ながらの風情がしっかりと残っています。

建物の見どころとしては、屋根の上に石が乗っています。これは旧居にもみられるようで、出雲地方では古くから屋根の「むねいし」として来待石を使用することのこと。来待石は柔らかく加工がしやすいため、様々なものに使用されたそうです。今でも町の中に屋根の上に石が乗っている古い家があるそうです。



屋敷の中に入ってみると、旧居も同じ武家屋敷ですが、全く違うお庭で、広さも全然違いました。より武家という雰囲気強く感じました。お部屋も、客間は天井を高く、家族で過ごす空間は天井を低くして、木の材質も客間の方にいいものを使っているそうです。

この武家屋敷は塩見縄手の名前の由来である塩見家が一期住んでいた屋敷だそう。また武家屋敷は藩の社宅のようなもので、位が上がると引越していたそうです。ちなみにこの武家屋敷は中級武士が住んでいた屋敷で、敷地面積はなんと700坪にもなるそう。位が上がるにつれてお城に近づいていったそうです。

この武家屋敷に住んでいた塩見家と小泉八雲は実に関係がありました。八雲の奥様の小泉セツさんのお母さまが塩見家の娘さんだそうです。小泉家と塩見家は親戚になるそうです。小泉八雲の旧居と塩見家が住んだ屋敷がとても近いのには、何か運命を感じるものがありました。

武家屋敷での取材を通して、江戸時代にタイムスリップしたような感覚になり、当時の人々の暮らしを五感で感じることができました。



取材を終えて

今回、塩見縄手の中でも小泉八雲に関する施設の小泉八雲記念館、旧居、武家屋敷を取材させていただきました。筆者自身小泉八雲の名前は知っていてもどのような人物なのか、どのような暮らしをしていたのかは全く知りませんでした。また松江市内に塩見縄手のような歴史を感じることもできる素敵な場所があることもこの取材を通して知りました。小泉八雲がこの松江の地で研ぎ澄まされた五感で何を感じ、縄手をあゆむ中で何を思ったのか、取材を通して小泉八雲の人物像が少し見えた気がしました。

普段の生活から少し離れ、塩見縄手に立ち寄って五感を研ぎ澄ませて歩いてみてください。小泉八雲があゆんだ時代にタイムスリップできると思います。そして、今まで見ることもなかった新しい景色とともにあなた自身の歩みを進めることができると思います。

(やまぎょうへい)



塩見縄手にある小泉八雲の像



等身大にあゆむ

(安来市)

佐々井遼太郎



澄んだ空気に、田んぼ道、虫の声。誰もが一度はあこがれたことがあるのではないのでしょうか。

懐かしい思い出がある人もいるかもしれません。そんな田舎へ実際に移住された方のお話を聞いてみよう、ということで、畑&お店に伺います。取材当日をととても楽しみにしていました。

11月30日、雨。就農支援制度を利用して移住された方にお話を伺うべく、安来市へ向かいました。

目的の地まで、地図を頼りに田舎風景の中を探していると、やけにお洒落なビ

ニールハウスが目にとまりました。どうやら、ここが目的の地「いちごの木△」のようです。お店の前には、なにやら作業中の人影が。本日お話を伺う、南真之さんです。



いちごの木△



いちごの木△は、いちごの栽培から直売に加え、珈琲やいちごの食べ比べまで楽しめる、カフェスペースを併設したいちご屋さんです。お店のドアを開くとすぐ、机に並んだいちごやジャム、カフェメニューの並んだ黒板が現れました。取材の準備をしていた間に間に来店された近所の方は、慣れた様子で気さく



に珈琲を注文されます。お店となるビニールハウスは、使われなくなった近場のビニールハウスを再利用する形で、解体から建設までを、南さんが自ら行われました。もともとは更地だったというこの場所。お店を造りあげていくなかで、次第に地域の方々からいただくようになった応援が、力になったとのこと。



お話を伺っている間、手作りのビニールハウスの中には、とつとつ雨の音が響きます。移住のきっかけは3つある、と南さん。1つ目に、家族との時間を大切にできなかったと。以前は神戸に住まっていた南さんですが、都会で働くなかで、10年後に過去を振り返った時に「きつと後悔するだろうな」と考えたのが、大きなきっかけになったと話されました。2つ目に、元々自然が好きなこともあり、緑豊かな安来市に住まいを移した方が、幸せに生活できるのではと考えたとのことです。3つ目に、騒音を気にして子どもの遊びを止めないといけないというマンション暮らしのなかで、子どもをのびのびと育てたいという気持ちがあった、と話されました。移住先として安来市を選んだ理由には、奥さんの実家があることに加え、久白町の田園風景の中に住んでみたいという憧れがあったそうです。実際に移住したことについて後悔は一度もしたことがなく、田舎ならではの不便さもまったく感じたことがないとのことでした。なにより空気のよさが幸せで、「山のおいを連れて吹いてくる風がすごく好き」とのこと。生活の質が向上したように感じておられるそうです。といっても、未経験から農業を始めると聞くと、やはりそれなりの不安があるように思います。しかし、大きな不安はなかつ



南真之さん

たと南さん。やはり奥さんの実家の存在など、自分自身、環境に恵まれていたと話されます。農業としていちごを展開していくことにも絶対的な確信があったそうで、神戸でアパレルショップに勤められていた経験から、デザイナー的な面には自信もあつたとのこと。また、繊細な性格も農業にぴったり合っているとのこと。物との角度とか、だいぶ変態チックなんですけど(笑)と、自身のこだわりを笑いながら話す南さん。思わぬ筆者との共通点から、繊細トークも弾みま



今では栽培から直売までを自力でこなしておられる南さんですが、移住前から農業に携わると考えておられたわけではありませんでした。とはいえ仕事を選擇するうえで「自分の時間をコントロールできるか」という条件を外すつもりはなかったため、企業に勤めるのではなく、自分で何かを始めたいという思いがあったそうです。そのため、自分のペースで働いている今の暮らしは、移住前の理想形に近い、と嬉しそうに店内を見渡

しながら話される南さんでした。自分の好きなものを集めてデザインしているという店内には、南さんの趣味であるアウトドアグッズや、古道具が並びます。カフェスペースに置かれている大きな黒板には、地元の子どもたちが描いたという絵や文字が。いちごのスペルが「THIGO」になっています。消すに消せないと笑う南さんも、嬉しそうな表情をされていました。



インタビューもひと段落ついたところで、いちごの食べ比べと、珈琲をいただくことになりました。心の中でひそかにこの時間を楽しみにしていた取材陣からは、思わず喜びの声が漏れます。今回は

ただいたのは、「あきひめ」「おくに」「よつぼし」の3種類。収穫のタイミングによつては、ここに「白乙女」という白いちごが加わり、また一段と可愛らしくなるそうです。



おすすめの食べ順を聞き、早速「よつぼし」から頂きます。甘みの強いいちごのあとは、さわやかな「あきひめ」。最後にまた、甘みの強い「おくに」です。取材陣一同、ひたすら「美味しい」としか繰り返せません。筆者も取材で来ていることをほとんど忘れて、ただただ幸せな時間を楽しみます。本当に、美味しいいちごでした。また、いちごはもちろん、珈琲にもこだわりをもって提供されています。オリジナルブレンドも一種類だけでなく、焙煎士の方との綿密なやり取りを経て、完成に至ったとのことでした。

山で飲む珈琲をイメージしたものなど、シチュエーションごとに作られたという味は、アウトドアグッズの並ぶ半屋外の環境もあつてか一段と美味しく感じます。珈琲といちごを一緒に頂く機会はないかなありませんが、これが意外と合うのです。近いうちに、ドリッパーバッグも納品予定とのこと。いちごも珈琲も種類が豊富なので、お店で楽しむ切れなかつた種類は、お家でいただくこともできそうです。貴重な体験を、ありがとうございました。



今後の展望について尋ねると、今以上の規模の拡大などは特に考えず、このままクオリティを上げていけたら、と。あくまで家族との時間を大切にしたいという思いで、本末転倒にならないようにと考えておられるそうです。等身大に、自分の「好き」な方へと歩み始められた南さん。さいごの別れ際まで、やさしいお顔で見送ってくださいました。まだ2作目だといういちごは、まだまだ美味しくなるそうです。来年でも、その次の年でも、また収穫の時期にお邪魔したいと思います。

(ささいりようたろう)





あゆ 夫婦で営む工房 (松江市)

田中小梅



広い田畑に囲まれた集落の路地に入っていくと、古い民家の入口に可愛い看板がありました。ここは、三島耕二さんが営む「いままみや工房」です。この工房の母屋はカフェとギャラリーになっており、陶芸体験もできます。

11月25日、松江市東出雲町にある「いままみや工房」を訪ね、三島耕二さんご夫妻に取材をさせていただきました。

工房のはじまり

三島さんが工房を始めた理由は、楽しいことをして生きていきたいから。絵を描くことが好きで、元々絵描きになりたかったそうです。しかし絵を描き、それを売って生活していくのは難しいと考え、絵を教えたり、焼き物を教えたりするようになったとのこと。松江市宍道町にあるモニメント・ミュージアム来待ストーンで11年間講師をした後、工房を始めたそうです。

三島さんがこの場所で工房をやろうと思った理由は、地元で家から近いから。また、八雲立つ風土記の丘で、この場所が古代出雲の都だったというジオラマの展示を見て、こんなところで工房ができたら楽しいだろうなと思ったからです。そのようなとき、たまたま売りに出していたこの場所は、出会うべくして出会った場所だと思っていると語っておられました。

工房を営んで

三島さんは、工房を営むやりがいを、常に感じているとおっしゃっていました。特に強く感じるのは、作りたいものを思いついて新しいことに挑戦しているとき。失敗することもたくさんある中で、思っても見なかったほど素敵な物が焼きあがったとき。また、お客さんが素敵だと言って買ってくれて、使ってくれて、良かったと言ってくれたとき。陶芸体験に来た人が、ものづくりを楽しんでくれて、笑顔になっているのを見たとき。ご自分の仕事へのチャレンジだけでなく、工房を訪れる方の喜びもやりがいになっているようです。





工房を営む上で一番意識しているのは、やはり来た人に笑顔で帰ってもらうこと。そのために、感謝の気持ちで接することを意識しているとおっしゃっていました。また、作る時には使い手の気持ちを考えて、お客さんが喜んでくれる顔を思い浮かべながら作ることを意識しているそうです。自分が好きな物を作って、自分がしたいことをしているけれど、お客さんとの対話だから本当に喜んでもらおうとしないと喜んでもらえないとおっしゃっていました。

一方、大変なことは、自信を持って作っても売れないときがあることだそうです。また、素敵な作品を作るための釉薬のかけ方、厚み、調合はどれも微妙で、それが合うまで試行錯誤するのはとても大変だそうです。しかし、微妙を狙わないと面白くならないとおっしゃっていました。それから、たとえ素敵な物ができて、同じ物をもう一度作るのには難しく、少しでもずれると違う物ができてしまうなど、失敗が多いのが大変だそうです。

三島さんの美意識に最も影響を与えたのは、白洲次郎の奥さんである白洲正子。白洲正子は美意識が物凄くあり、小林秀雄等と付き合いがある人物です。骨董や着物が好きで、いろいろな美術家と交わった生活を文章に書いていました。



古民家の楽しみ

今までで一番印象に残っているのは、西日本豪雨や熊本地震のときチャリティーでコンサートをしたり、他の窯元や絵描きの人にも声を掛けギャラリーをしたりしたことだそうです。いろいろな人にこの場所を使ってもらい、楽しんでもらったとおっしゃっていました。





古民家を綺麗にリノベーションしてしまうのではなく、手を入れずに残しているのは、今ある物を大事にすること、活かすことが大事だと思っっているから。三島さんは飛騨高山白川郷に行つたとき、古い民家の力や、日本家屋の力はすごいと思つたそうです。古い民家や日本家屋が無くなつていってしまうのはもったいない。こんな風に活かして、美しく活用することができるといいことを見てもらい、古い民家や日本家屋を残していきたいという思いがあるそうです。

また、活かすという発想がないと、良い絵が描けないとおっしゃっていました。絵を描いているときに、偶然綺麗な色が出ることがあるそうです。その偶然がわかつて、活かすことができるか。目の力、活かす力が絵を描くには必要かどうかです。



夫婦で歩む

工房を営む上で、奥様が色々支えてくれるから好きにできているとおっしゃっていました。奥様ご自身は直接創作をするタイプではないものの、耕二さんのやりたいことを理解して、面白がつて手伝ってくれるそうです。夫婦で仲良く、いつも二人三脚とのことでした。

今後の展望や目標としては、長く続けられたら良いとおっしゃっていました。そして、もつと焼き物を突き詰めていきたいそうです。今はデザインに力を入れていて、模様をつける等をして可愛い物を作っているとのこと。しかし今後は土と釉薬、焼きの力だけでシンプルに良い物を作りたい、大地から出てきた物がそのまま形になった物が作れたら良い、とおっしゃっていました。



▲三島さんご夫妻



三島さんはうつわや絵などの作品だけではなく、工房の建物から展示の仕方に至るまで、隅々までこだわっておられるということがわかりました。取材に行つて、たくさんさんの素敵な作品を見ることができたうえ、素敵なお話を聞くことができるとも楽しかったです。今度は陶芸体験をしに工房を訪れたいと思えました。

(たなかこうめ)

66 AYUMU 99 Yonago, Tottori

Nostalgia × Novelty



懐かしさ × 新しさ
(米子市)

岩井 円

みなさん、夏の風物詩といえば何を思い浮かべるでしょうか。海水浴や花火大会、バーベキューなど、夏は楽しいイベントが盛りだくさんですね。

鳥取県米子市では毎年夏、土曜夜市で盛り上がります。土曜夜市とは様々な屋台で賑わうイベントで、米子市では1951年、全国に先駆けて開催されました。商店街を大きく使い毎年多くのお客さんが訪れる活気あふれるイベントでしたが、2009年、商店街店主らの高齢化により継続開催の終了を余儀なくされています。その後何度か開催されるも、再開には至らず途絶えてしまいました。

そんな商店街に活気を取り戻すべく、ある一人の女性が立ち上がりました。今回取材を受けてくださった亀井智子さんです。

元々フリーランスのデザイナーだった亀井さん。現在はまちづくり事業を展開するデザイン事務所や飲食店の経営、さらには商店街理事としても活動されています。デザイナーとしての経験や知識を生かし米子の活性化に尽力している亀井さんに、お話を伺いました。

「米子の土曜夜市は、私にとっても周りにとっても、楽しい思い出なんです。」

かつて、約60年にわたり開催されてきた米子の土曜夜市ですが、亀井さんご自身も幼い頃楽しみに出かけていました。その楽しい思い出をもう一度復活させたい！若い世代にも広めたい！という思いから、亀井さんは立ち上がりました。

「2〜3人の仲間が、気づけば2倍、3倍に」

まず亀井さんは、仲間集めから始められました。商店街の方々のつながりを深めるだけでなく、まちづくりがしたい方のためのイベントにも参

Interview



加し、人脈を広げました。亀井さんの活動に賛同してくれる方は予想以上に多く、沢山の応援、協力を受けることができたそうです。

そしてついに、実際に土曜夜市開催に向けて動き出す「土曜夜市実行委員会」を立ち上げました。

「米子はフィールドが無量大。誰でもヒーローになれるんです。」

亀井さんに米子の魅力をお伺いしました。それは一人ひとりが輝ける場所であること。米子の活性化のために大きな一歩を踏み出した亀井さんですが、応援してくれる人、協力してくれる人は亀井さんの予想を上回りました。

誰でもアイデアが生かせる、誰でも活躍できる、米子はそんな場所であるというところを実感されたそうです。

〈復活！一夜限りの土曜夜市〉

2019年、〈復活！一夜限りの土曜夜市〉と称し、遂に米子の土曜夜市が復活を遂げました。昔の名残を再現しつつ令和の新しさも感じられる、新旧の良い



Doyouyoichi

土曜夜市は大盛況。
子どもの姿も多く見られます。

ところだけを掛け合わせた唯一無二のイベントになりました。

SNSでの情報発信や写真映えスポットの設置など、若い世代へのアプローチも欠かしません。地元中学校吹奏楽部による演奏や米子市長が参加する企画など、屋台以外のコンテンツも充実した土曜夜市は、大成功を収めました。

コロナの影響で、翌年2020年の開催は見送りとなってしまいましたが、一夜限りの復活をきっかけに新たなイベント〈サンロードマーケット〉が誕生しました。年に一度のビッグイベントとなった土曜夜市に対し、サンロードマーケットは月に一度のペースでランチタイムに開催され、よりライトな感覚で気軽に立ち寄れることが最大の魅力です。

「自分らしく働く、自分軸がある人」

元町通商店街で行われる土曜夜市やイベントに参加されるお店はどのようなお店なのでしょうか。亀井さん曰く、それは、「自分軸があるお店」なのだそうです。

イベントには飲食店、雑貨店、体験型のお店など、バラエティに富んだお店が多数出店され、その中には店舗を持たずイベント出店のみで営業されるお店も多くあります。そんな皆さんに共通するのは、「自分らしさ」。個性やこだわりが詰まったお店には、自然と足を運びたくなる気がします。

「楽しみで眠れない」

亀井さんご自身の幼いころの思い出である土曜夜市。今は地元の子どもたちにとっても毎夏の楽しみとなつていようです。小学校に配布されたチラシを見た子どもたちからは、「楽

地元のお店が大集合。
魅力たっぷりのイベントです。

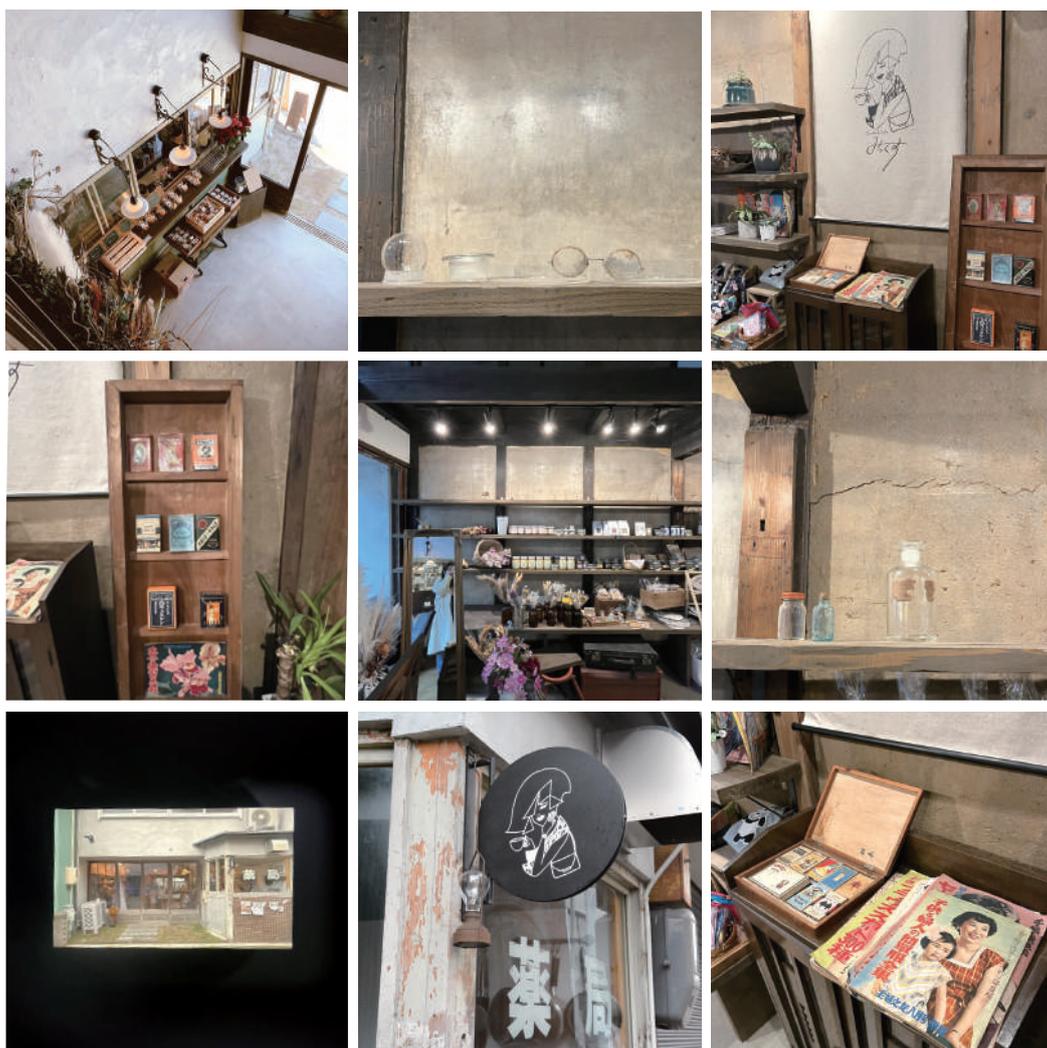
SunroadMarket





Goods & Cafe みつくす

薬局だった頃の名残が残る店内。
薬瓶などの小物を探してみるのも楽しいかも。





昭和の土曜夜市へ
タイムスリップ



元町通り商店街振興組様より、ご提供いただきました。

しみで眠れない！」という声。今も昔も変わらず、幅広い世代から愛されています。

「地域の魅力を“みつくす”させて、新しい価値を創造していく場所」

2022年4月、元町通り商店街の一角に、亀井さんがオーナーを務める古民家カフェ「Goods & Cafe みつくす」がオープン。日常的に人が集まる店舗の必要性を感じた亀井さんは、カフェやレンタルスペースを兼ね備えたお店のオープンを決意されました。

さらに、こちらなんと元薬局なんです。亀井さんはこの店舗に出合った時、「ここなら必ず魅力的なお店が作れる」と確信したそう。薬局のパーツを最大限に生かしたカフェに生まれ変わりました。

昔の面影をしっかりと残した店内は、平成生まれの筆者もどこか懐かしさを感じるようなほつとする空間。インテリアにも強いこだわりを感じます。店舗に残されたままだった薬瓶や雑誌、たばこ箱なども店内を彩る小物として大活躍しています。

オープンから8か月、既に12000人以上もの来店数を記録されており、多くのメディアにも注目されています。

「地域活性化にはゴールが無い」

亀井さんの今後の目標は、商店街の空き店舗を減らし、まちづくりの手助けをすること。今年オープンさ



元町通り商店街から
“あゆむ”

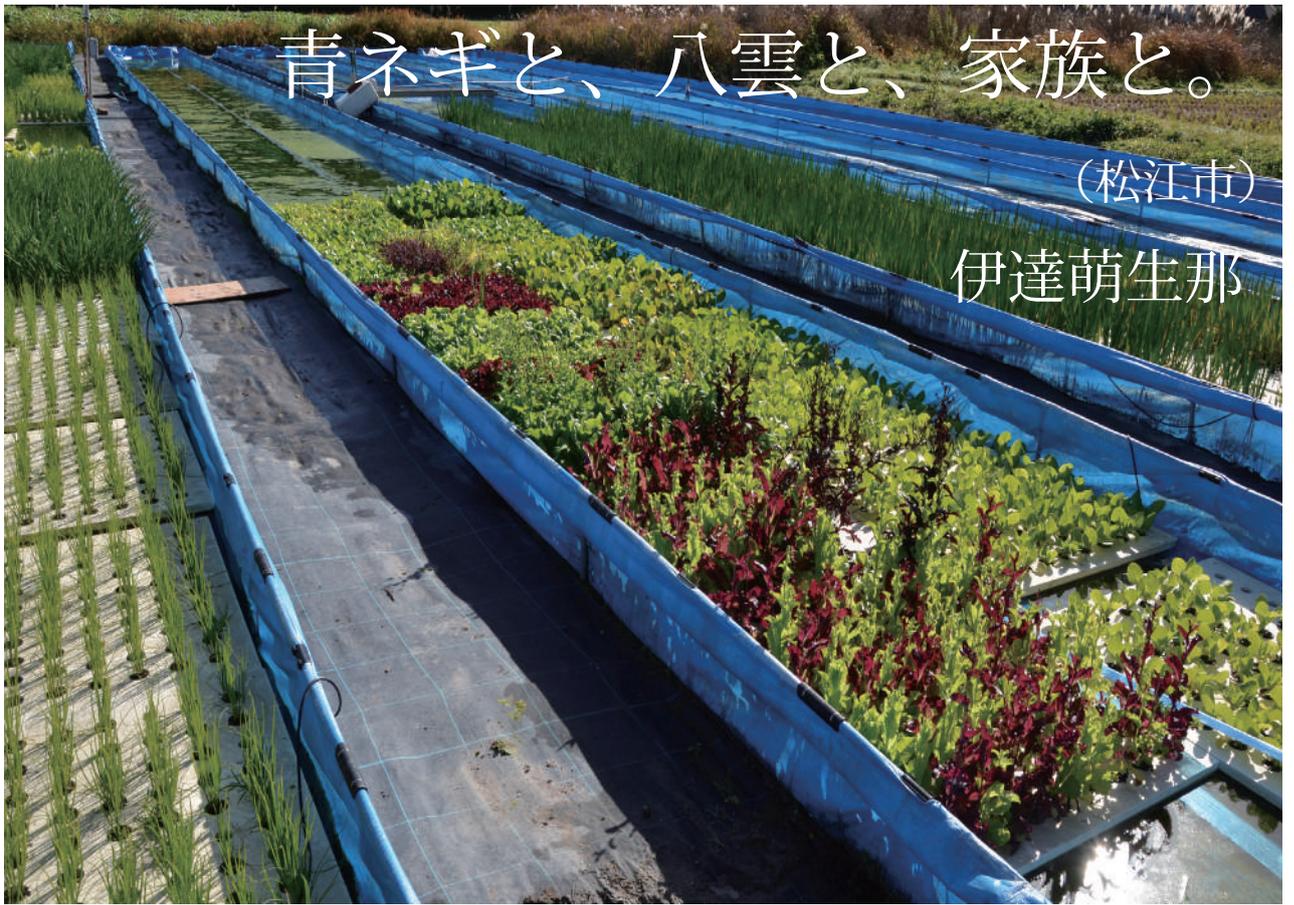
れた「Goods & Cafe みつくす」も、商店街の空き店舗を改装して作られたカフェです。同じように商店街で新たなことを始めたい人を応援することも、亀井さんの活動の一つ。

しかし、お店を始めたい側と空き店舗を提供したい側とのマッチングが成立しても、トイレのインフラなど、お店の状態が整っていないことも多くあるそうなのです。それらの改善や、イベントを行うパティオ広場の雨天時の対策などが今後の課題であると、亀井さんは話してくださいました。

自ら道を切り開き、新しいことに挑戦し続ける亀井さん。目まぐるしい毎日を送られている亀井さんですが、家に帰れば3人のお子様のお母さんです。ご家族や周りの協力があったことで、今のような経営や活動が出来ているとのことでした。

亀井さんのように何かチャレンジしたいことがあるなら、米子をもってこいの場所です。興味を持たれた方、まずは最初の一步を踏み出してみませんか？

(いよいよまどか)



青ネギと、八雲と、家族と。

(松江市)

伊達萌生那

HINOHARA 農園

☆八雲町にプール を使った水耕栽培 の農園があります。



なぜ、プールで？ 水耕栽培とは？ どんな人が作っている？ どんな野菜を育てている？ 疑問の果てにたどりついた、三児の母であり、水耕栽培農家をされているひとり農家・日野原真子さんに取材をしました。

HINOHARA 農園は、松江市の八雲町にあり、自然に囲まれ近くには意宇川が流れています。

農園の場所は元々、日野原さんの祖父母の畑だったそう。

10年くらい放置をされていて、どうにかしたいと思っていたといいます。はじめは草が生え放題で、機械を持っている農家さんに手伝ってもらって綺麗にされた



そうです。農業を始めた日野原さんにとって、周囲の農家の方はとても頼れる存在なんです。



ハウレンソウやチンゲン菜、レタスなど



・水耕栽培の方法

実際の畑を目の前にして、栽培されている野菜を紹介していただきました。まず目につくのが、青ネギ。これも根も食べられるんだそう。臭みの無さは水耕ならではの、土壌では無理だということですよ。他にも、青梗菜、ほうれん草、ラディッシュも育てられています。このなかには、知り合いの農家さんに苗をいただいて育てている野菜もあるそうです。現在、実験でいろいろと作っているとのこと。水耕栽培を専門的にやっている方が周りにはいなくて、どんな野菜が水耕に向いているか手探りで探していると説明してくださいました。また、今育てている葉物野菜は育てやすく、手間が少なくて一人



で作業しやすいとのこと。日野原さんは、様々な野菜を栽培しながら水耕栽培のやり方を確立している最中のようなのです。



プールから取り出した青ネギ

日野原さんは青ネギをプールから取り出して私達に見せてくださいました。

水耕栽培の苗は、土に植えるものと同じでポットで育てているんだそうです。野菜を育てる上で必要な肥料は水に溶かして毎週決めた量を入れるようにして、ECという機械で濃度も測っているとのこと。肥料の濃度は、川の栄養分が一般的に0.3程度のところ、畑では1.0〜2.0くらいに保っているため、

実際に EC で測った数値を見せていただいた



雨等で薄まると足さなければなりません。濃度を測る機械である EC は、市から無償で借りているそうで、濃度を管理しないとダメなのです。日野原さんにうかがうと、「以前は、ざっくりとした分量で全て行っていて、全く野菜が育たない状態でした。でも、濃度を測って数字で決めるようにす

ると育つようになりました。数字が結果を出しますね」とのことでした。

栽培されている野菜を見てみると、プールにブクブクと気泡が出ているところがありました。

これは、プールに酸素を送っているようです。

夏に酸素がなくて野菜が育たなくなってしまうと、それで始められたとのこと。

さらに、酸素を保つために水を入れ替えてしまうと肥料も流れてしまうので、1つのプールに10個、5つプールがあるので50個の酸素を送る場所があるそうです。水耕栽培にとっては、肥料や酸素の濃度が重要であり、日野原さんは上手いかな場合は原因を調べ、それに



酸素がブクブク



ポットで育てられている苗

応じて的確に改善が出来るから栽培が上手くいっているようです。

そして、このプールは繋がっている長い骨組みにビニールシートを被せて作られています。2m間隔に支柱を設置して支え、水は5cmと決められた量が入っています。「以前は入れる水の量が出す量よりも多くて、溢れたりしていたんです」とのことです。この5cmという単位は、日野原さんが試行錯誤の末にたどり着いた定量の一つなのです。

水耕栽培のやり方は、「ハウスでもできます。でも、この方法はハウスでやるよりも初期費用が半分以下に押さえられるんです。それに、ハウスだと八雲では冬に雪が降って壊れることもあるんですよ」とのことです。日野原さんが水耕栽培をプールで行ったのは「始めやすさ」と「八雲町の自然環境」が理由でした。

その後、農園から作業場の方へ移動しゆっくりとお話を伺いました。





プールになっているブルーシート

・掲げるテーマ、 人々の助け

日野原さんが、『子育て世代の女性がひとりで出来る持続可能な農業の確立』をテーマにしたのは、何で農業してるの？ と聞かれることが多かったことがきっかけだったそう。元々、農業に興味はあったものの趣味ではできないとは思っていて、仕事を辞めるタイミ



プールに移されたばかりの赤ちゃん青ネギ

ングで農業をスタートされました。農業を始めて1年の研修期間が人生で一番キツかったそうです。

その研修期間で農業は大変だなと感じたのですが、畑を見ない期間があっても大丈夫で、育てやすい水耕栽培「EZ水耕」なら、子どものいる人でも出来ると思ったそう。日野原さんは、「子どもがいるから無理と諦めるのはもったいないと感じて、女性の目に止まって欲しいからテーマを立てました」とおっしゃり、自身の生活環境に合った農業の仕方を研修で見つけ、立場が同

じ人が諦めずに挑戦できるように知ってほしいという思いから、このテーマを立て活動されています。

日野原さんが野菜を出されている黒田マルシェは、Instagramでの繋がりがから参加するようになったそうです。「主催者の岡田さつきさんのご主人が農業をやっているという共通点もあり出店することになりました」とのこと。一方ネギの加工品を作りたいと考えていた日野原さんに、八雲町のジビエ料理店安分亭さんが、お手伝いしますよという形で繋がったそう。青ネギを持って余して、加工品を作りたいと農業委員会の方に相談したところ入つてで、安分亭のオーナーである合同会社式百円の森脇さんと知り合っただけです。地元の食材を使って地元の農家を助けておられる合同会社式百円の森脇さんが、うちで使わせてもらっても良いですかということで出荷するようになったそうです。SNSや農業委員さんの人脈でマルシェへの参加や安分亭への出荷が実現しており、人の繋がり的重要性を表す出来事です。

・これからの活動

これからどのような活動をしていきたいと思いますかと日野原さんにうかがうと、「今は顔の見えない人のために作っています。マルシェに参加して顔を見て売りたいです。それに、元々給食に野菜を出したいと思ってはいたんですが、作ります！ といってそのように作れるわけではないんです。実際に何回か、作れないで、子ども達のために使ってもらえるのが一番嬉しいですね」とのことでした。お客さんの顔をみて売れる機会が増え、人との繋がりも増えると日野原さんのように新しく農業を始める新規就農者も増えるのではないのでしょうか。



これからの活動について、お話を伺った



日野原さんの祖父母の家にあるもともと牛小屋だった所を見せていただいた



旧牛小屋でお休み中のコウモリさん

今回、取材をさせていただいた日野原さんは、やりたいことに向かって挑戦されており、周囲の人に頼りながらひとり農家をされています。初めて日野原さんを Instagram で知った時に、「お母さんが一人で農家！？ これは取材しないと！」と思いました。そして、実際に取材させていただくと、全然上手くいかないこともありキツいと感じることもありますが、どうやったら上手くいくかを試行錯誤しながら挑戦していらつしやいました。

(だてもえな)



プール越しに見える八雲町の自然



「幸せの循環」(安来市)

安来駅

YASUGI STATION

安来駅は、2008年に建て替えられました。その際、従来の鉄道駅としての役割だけではなく、「人が集う場」としての役割も持つようになりました。足立美術館が近くにあるため、日本人だけではなく外国人の方も多く利用する場所です。今回は、そんな安来駅で行商を行っている「ankuru」取材しました。





ankuru

「幸せの循環」幸せのきっかけとなるお店

ankuru は、主に安来駅の改札横で品物の販売を行っています。
駅ということもあり人通りが多く、みんなが思い思いに見物しています。
では、ankuruとはどのようなお店なのでしょう。



2011年に立ち上げ、今年で11年目を迎えた「ankuru」は、月ごとに決めた日に開店します。

店主の伊達紗由里さんは、地元の良いものを知ってもらい、手にとってもらえる場所としてお店を出したいと考えていました。また、店舗を構えたいという夢を持っていたのですが、実現が難しい状況にありました。しかし、行商や人生の大先輩である方から「一週間に一回から始める夢があったら良いんじゃないかな？」という言葉ももらったこともあり、行商という形で始めたそうです。

ankuruは「幸せの循環」がテーマとなっています。紗由里さんは、消費者としてこの品を使えることが、なんて幸せなんだろうと思ったときに、自分だけではなく他の人にも伝えたいという気持ちをもったそうです。そのため、様々な人に知ってもらうためにも、つなぎの場を意識しながら活動をしています。様々な人に寄り添うことで、どんなに小さくても「豊かな時間」を感じ「これがあつてよかった」と思えるきっかけになれるように思っているそうです。また、実際に販売を行う中で、お客様から品物を使うことで幸せになったエピソードを聞くこともあり、これこそが「幸せの循環」であると嬉しそうに語っておられました。

商品のセレクトについて

ankuruの品物は、伊達さんが生活に取り入れてみたいと思ったものや、自分たちが本当に良いと感じたもののみを販売しているため、唯一無二の品揃えとなっています。お菓子や染物などジャンルを問わず様々な品物が並んでいるのは、まず「何屋さん？」と興味を持ってもらう意図があります。そして、その品物がどのように作られているのかといった背景をお話することで、品物について知ってもらいたいのです。紗由里さん自身も品物の背景を知ること、ただ消費するだけではなく感謝の気持ちをもって、ありがたく使うことができるようになるとおっしゃっていました。



ankuruの由来

店名の由来は、安来という地名からきています。本来ならば、「やすぎ」と読むのが一般的ですが、それを「安↓あん」「来↓くる」と読み替えたそうです。地名を店名にしたのは、安来はankuruが始まった聖地のような場所であることが関係しているとのこと。また、「安らぎが来るお店になりたい」という思いも込められており、「皆にとつて居心地の良いお店であり続けたい」とおっしゃっていました。



安来駅で活動をしている理由

ankuruは、基本的に安来駅をベースに活動しています。安来駅という場所は、ankuruを始める契機となった聖地のような場所であり、ご縁が巡り合う不思議な空間でもあるそうです。実際に取材をした日にも、引率の先生が友人と再会するという偶然もありました。本当にご縁が巡り合う不思議な場所だなと感じました。また、地域を盛り上げたいという気持ちもあり、安来という場所へ出店することになったそうです。さらに、安来をベースに、いろいろな地域にも出店されます。人が繋がることで地域が豊かになると考えているため、「自分が動くことで、安来」という名前を知ってもらえる契機になれたら」とおっしゃっていました。



安来駅前ロータリーに描かれたどじょう

伊達紗由里さんは兵庫県の都会出身です。大学のイベントで出会った方と20歳の時に結婚し、来年の6月で23年目を迎えるそうです。夫婦円満の秘訣は思いやりを持つこと。お話をうかがって、まさに思いやりや理解にあふれた夫婦だと感じました。紗由里さんは、旦那さんの和彦さんが「太陽のような人」とおっしゃっていたように、とても明るくて話し上手な方です。現在のご本人からは想像もつかないですが、元々はネガティブな面もあったとのこと。しかし、様々な経験やお母さまからの教えなどもあり「ネガティブな感情があったからこそポジティブであれた」と思えるほどプラスに考えられるようになりました。また、「いかさされている命をどうかすか」ということを考えたときに、自分が人を幸せにすることができるのなら、こんな仕事もいいなと思ってしまうそうです。

伊達紗由里さんについて



取材に伺ったら逆にお土産をもらってしまいました



紗由里さんは、とにかく一人ひとりに寄り添った会話をしています。それには、生きづらくなっている世の中だからこそ、人との出会いやコミュニケーションが大切であると考えていることが関係しています。そして、その大切さを教えてくれたのは二人の子供たちだったそうです。だからこそ、家族で過ごす時間の重要性や生活に寄り添うことを大事にされており、それが接客にも反映されています。

また、「皆がありのまま認め合える世の中になれたらいいな」とおっしゃいます。自分だけではなく、皆で幸せや喜びを分かち合おうとする姿勢が伝わってきました。



▲交流プラザが併設されている



取材を終えて

筆者は、社会人は日々の生活に追われていて夢や希望を持って生きている人は少ないと考えていました。しかし、今回取材をさせていただいて熱意を持って働いている方もいるのだと実感しました。なんとなく仕事に対して感じていた嫌悪感が消えて、少しプラスの方向にも考えることができました。

また、生活の面では丁寧な暮らしをしたことがないため、まったく別の価値観で生きている方のお話を聞けて、面白かったです。将来、働き始めてお金に余裕ができたら自分の暮らしについても考えていこうと思いました。

ともに歩む

(松江市)

三原 愛華



左：『島根ハーネスの会』会長 三輪利春さん

日本には日本盲導犬協会という盲導犬育成や視覚障がい者福祉の増進に寄与することを目的とした協会があります。島根には、協会4つ目の盲導犬訓練施設である、島根あさひ訓練センターも存在しています。今回は、日本盲導犬協会さんのサイト (<http://www.moudouken.net/>) を参考に学びつつ、実際に盲導犬の補助を受けている三輪利春さんと盲導犬グランくんにお話をお伺いしました。

人と歩む

盲導犬とは、目の見えない・見えにくい人が移動する際に、障害物や段差などを避け安全に歩けるようサポートをするために訓練された犬のことです。道路交通法によって、視覚障がいを持つ人が道路を通行するときは、政令で定められた杖や盲導犬を連れているしなければならないと定めら

盲導犬とは、目

囲に視覚障がい知らせることで障がい者本人とその周囲の人との間で起こる可能性のある事故のリスクを下げることに繋がります。このように盲導犬は人間社会に大いに役立つ存在です。盲導犬の基本的な仕事は、「道路の端に沿って一定の速度でまっすぐ歩く」「交差点や段差、曲がり角

があれば止まってユーザーに教える」「障害物をよけて歩く」といったものです。役割からわかるように、盲導犬の育成はとても困難で、成功率は約3から4割ほどだそうです。盲導犬になることのできなかつた訓練犬たちは家庭犬として新しい生活を送ります。盲導犬は、子犬期に家庭に預けられ（このボランティアのことをパピーウォーカーと言います）人との生活に慣れてから、訓練センターで盲導犬にな

るための訓練を受けます。そして、およそ10か月の訓練を経て盲導犬としての仕事が始まるのです。しかし、盲導犬としての訓練は訓練センターだけで終わりではありません。盲導犬として生活が始まってからもユーザーの人と一緒に訓練をするようです。確かに、出会ったばかりでは犬も人も慣れないですからね。三輪さんも、盲導犬と生活を始めてすぐに自由に歩けると思っていたら車道の真ん



前方のタクシーに気づいたグラン君



グラン君が避けていることに三輪さんも気づいた様子



無事タクシーを避けられました！

中を歩いていたということがあったと笑いながら話されていました。また、盲導犬の引継ぎの際にも代替訓練があるそうです。このように、盲導犬はたくさんさんの訓練を経ることで盲導犬として仕事ができるようになり、人も共に訓練をすることでやっと盲導犬と一緒に暮らせるようになるのです。



ばかりです。外ではきちんと三輪さんのサポートをしているグランくんですが、家に帰ってリードを離すと走り回ったりスリッパを唾えたり、三輪さんの足を踏んだりとまだまだ遊びたい盛り。しかし、家の中でもリードをつけた瞬間とても大人しくなり、盲導犬としての仕事を立派にこなしていました。家族の一員として馴染んでいる盲導犬ですが、ユーザーとの信頼関係が必要不可欠。盲導犬も犬なので餌やりや定期的なケアが大事で、三輪さんは一か月に1回、自らグランくんのシャワーをしているそうです。散歩は朝と夜

に2kmほど、餌は決められた量のドッグフードを一日に2回。なぜドッグフードだけなのかをお聞きすると、人間の食べ物を食べさせると、食べ物に意識がいくようになり仕事に集中できなくなるのだそう。三輪さんは盲導犬と生活し始め

たころは良かれと思ってあげていたのですが、盲導犬としての仕事を放つて食べ物に直行することがあったのでドッグフードだけあげることになるとおっしゃっていました。また、外に出たときに近所の方などが盲導犬に食べ物を与え

犬と歩む

盲導犬についてある程度知ることができたところで、盲導犬との生活の実際について、三輪さんにお伺いしました。

三輪さんのパートナーである盲導犬グランくんは、人間の年齢でいうと16歳。盲導犬になったのはなんと令和4年10月17日からだそうで、まだ盲導犬になった

たころは良かれと思ってあげていたのですが、盲導犬としての仕事を放つて食べ物に直行することがあったのでドッグフードだけあげることになるとおっしゃっていました。また、外に出たときに近所の方などが盲導犬に食べ物を与え





県から発行されたパンフレットやしおり

てしまうことがあったり、人が多いと盲導犬に寄ってきて集中力が散漫になってしまったりと困ることが多く、人がいるところにはあまり行かないようになったそうです。他にも、豪雨などで避難所に行ったときに、なぜ犬を連れていたのかと聞かれたり、拒否をされることもあったそう。そこで三輪さんが会長を務め



られている島根ハーネスの会などが県に要請をし、令和4年の3月31日に補助犬OKの啓発ステッカーが作成されました。

このように周りの人たちの理解不足によって悲しい思いをされたことも多くあり、三輪さんは定期的に盲導犬ユーザーを集めて交流会を行い、そこで出た意見を県や国に要請されているようです。



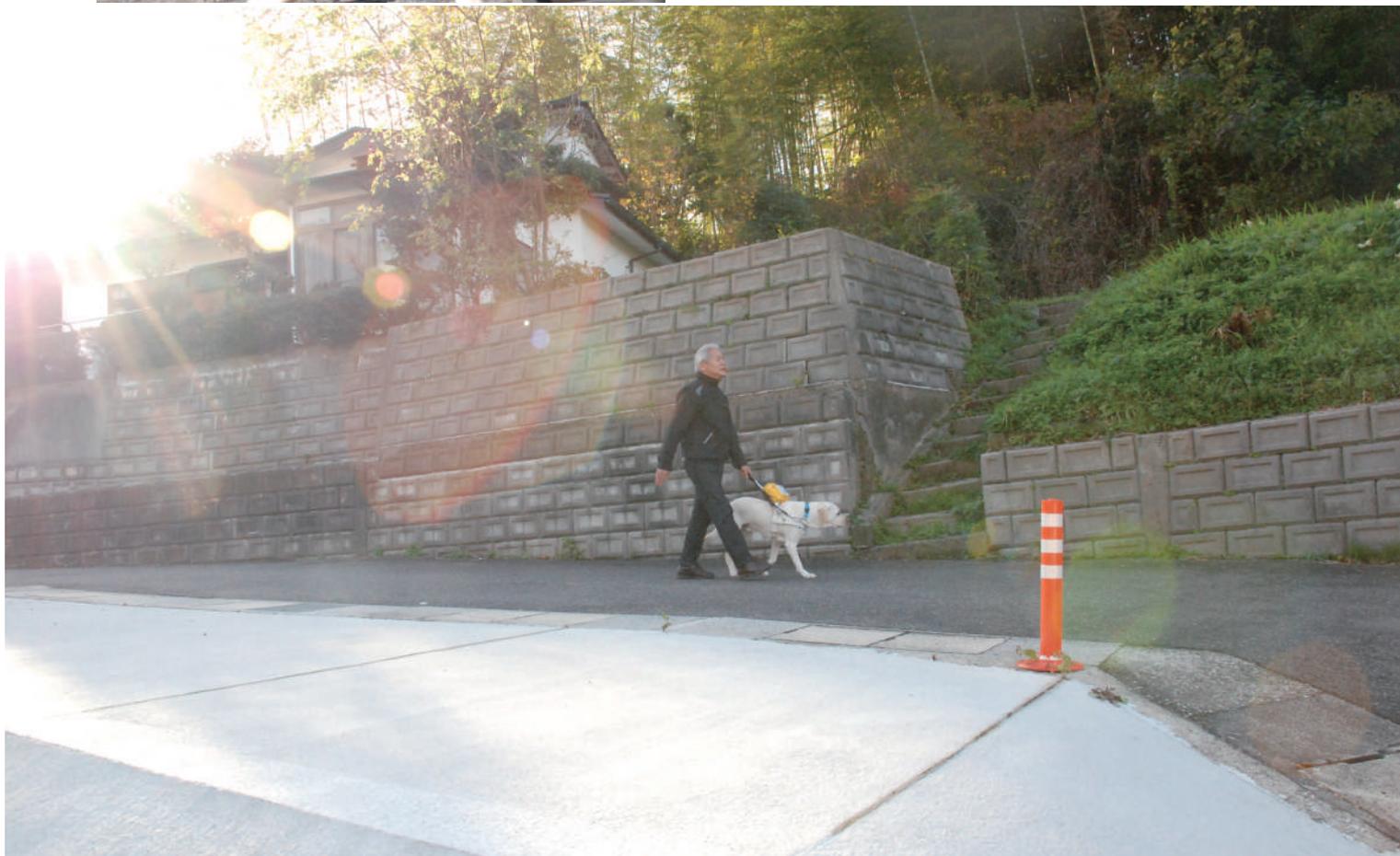
三輪さんの近くでくつろいでいるグラン君

皆と歩む

盲導犬は生まれ
たときから引退後ま
で、パピーウォー
カーなどたくさんの
ボランティアの方に
よってお世話をされ
ています。盲導犬
は視覚障がいを持っ
た方を支える仕事を
担っていますが、家
族あるいはパート
ナーとして、人と犬
それぞれがお互いを
支えあってもいるの
です。また、現在島
根県には12頭の盲導
犬がいます。動物が
好きな人は盲導犬を
見るとつい触りたく
なったり、何かを与

えたくなったりする
かもしれません。し
かし、盲導犬が外で
補助をしているとき
は様々なことに注意
を払っている状態
です。そのため、声
を掛けることや故
意に近づくことで
盲導犬の気が散っ
てしまい、サポー
トを受けている方
にとつては危険で
す。外で盲導犬を
見かけた時は、盲
導犬がしっかりと
補助できるように
気を払いつつ距離
をとりましょう。
お互いがお互いを

気遣い支えあうこと
で、視覚障がい者と
盲導犬もまたみんな
と歩むことができる
のです。
(みはらあいか)



国境を越えた歩み 国際交流員の思い

(松江市)

和田在月



崔美貞(チェミジョン)さん

【韓国の居昌出身で2020年12月
に来日して島根県へ】

松江市の国際交流員である崔美貞さんは、小さい頃から日本に興味があり、独学で日本語を勉強していたそうです。今回は、崔さんに気になることをいろいろ聞いてきました。

そもそも崔さんは、なぜ韓国から日本に渡り国際交流員という活動をしてられるのか、なぜ島根県へ来たのかをお尋ねしました。さらに、最近日本では、韓国ファッション、K-POPなど、韓国文化が流行していますね。筆者自身もファッションで韓国文化を参考にさせてもらっています。そんな韓国文化の大流行について、韓国の方はどう思っているか、崔さんにうかがってみました。

崔さんは、小さい頃から日本が好きだったそうです。きっかけは日本のアニメ、音楽。小さい頃からよく見ており、日本に興味湧き、住みたいと思うようになっていきました。そしてアニメを見てみると自然と日本語が分かるようになっていたといいます。さらに、日本のことを好きになったきっかけがもう一つ。韓国にたまたま来ていた日本人に

会ったことだそう。その時初めて日本人と会い、日本人の人柄にとっても親しみを覚え、より日本という存在が近くなったとのことでした。



テーマ 1

国際交流員について



国際交流員について

では、なぜ国際交流員という職に就いたのでしょうか。崔さんは、日本語の授業の時に国際交流員という仕事があることを知り、国際交流員の道へ進みました。そして、JETプログラムの試験に合格し日本にやってきましたが、自分で場所は選べないため、島根県にいるのは「たまたま」だそうです。苦労したことはありますか？ とうかがうと、「日本が現金社会なところ」とおっしゃいます。韓国での会計は、ほぼスマート決済なので、慣れるのに時間がかかったようです。一方、崔さんが感じる島根県の魅力がうかがうと、「島根県は静かな独特な雰囲気が良いですね。街並みも風情がありとても居心地が良い場所です。とくに宍道湖が魅力的だと思います」と言ってくれました。

さて、崔さんは、韓国と日本の関係がどうなれば良いとお考えなのでしょう。今はコロナの影響で交流は難しいですが、「他国との交流は大切でもっと増やしていきたい」とおっしゃいます。やりたいこととしては、「近いようで遠い日本と韓国の食文化を繋げていきたい。なので、まず韓国の料理講座を開きたいです」とのこと。おすすめの韓国料理は、

「キンパ、チジミ、チーズタッカルビです！ 簡単でみんな作れるのでぜひ作ってみてくださいね」と笑顔で話してくださいました。

崔さんの国際交流員としての目標をうかがいました。すると、「今までも含め、これから私がすること一つ一つが、日本と韓国の交流に繋がれば良いと思っています。これから先、日本に関わる人にも関わらない人にも、少しでも良いので私がやってきたことが伝われば良いです」とのことでした。



テーマ2

日本流韓国文化



文化について

今日本では、韓国文化が流行っています。ファッション、音楽、食と、コンテンツはさまざま。はたして韓国の人には、日本で流行る韓国文化はどう思われているのでしょうか。

一例として、ファッションについて崔さんは、韓国のファッションに似ていると言われれば似ているが、見れば日本人だなとわかっちゃうのだそう。つまりは、全く真似出来ないということでしょう。とても悔しいですね。まだまだ自分のファッションは改良の余地がありそうだと開き直りました。

では、日本に来て好きになった日本文化はあるのでしょうか。崔さんは、日本人には余裕があるように見えるそうです。例えばバスに乗る時、韓国では席に座る前にバスは発車するそう。しかし日本では、しっかりと座ってから発車します。そういった面で日本人の余裕を感じるとのこと。そして、やはり日本の食文化。「私はお寿司が好きです。そして、韓国ではあまり売っていないタンが売っているのにもびっくりしました」と笑っていました。

明るい崔さんのお話をうかがって、筆者自身の韓国への興味もさらに湧いてきました。崔美貞さんのご活躍により、日本と韓国の交流はさらに進んでいくことでしょう。日本と韓国の関係がもっと良くなっていくことを願っています。



韓国発祥の「指ハート」

12月17日土曜日 於…国際交流会館
国際交流イベント、クリスマスフェア



今回のイベントでは5カ国の方が小学生と交流なさっていました。「福笑い」や「輪投げ」、「スノードーム作り」など、さまざまなゲーム等で盛り上がりまりました。

(わだありつき)



↓お店とアランさん



大橋川の川沿いにある「巨人のシチューハウス」は、日本では珍しいアイルランドの家庭料理を体験できるレストランです。店主のアラン・フィッシャーさんは、店名が体を表すよう

日本に上陸した巨人 美味しいシチューと共に (松江市)

野津 智之



↑お店の内観。民族音楽をバックに食事が楽しめます

に、2mを越す長身のアイルランド人です。アランさんは、日本にアイルランド文化を広めることを目標にしておられます。そのため「巨人のシチューハウス」の店内では、食事だけでなく、アイルランドの民族音楽や芸術を楽しむようになっています。アランさんはIT系の大学を卒業後、アイルランド政府が紹介した企業の内から、日本

の「富士ソフト」に入社しました。アランさんがわざわざ英語が通じにくい日本の企業を選んだ理由は、ご本人曰く「挑戦だった」とのことです。「富士ソフト」を退社した後、アランさんは2015年、銀座に「巨人のシチューハウス」一号店を構え、数年後にはアイルランド産のビールの輸入や、ECビジネス、つまりWebサイトを用いたオンラインでの商品販売も展開するようになりました。しかし、事業を広げたことにより店が手狭になったことや、コロナパンデミックで飲食店の経営が難しくなったことで、「アグレッシブにビジネスをブッシュする」必要に迫られ、新たな店舗の開店に踏み切



↑筆者の自転車と並んでいただきました。大きい！

ります。新天地の候補としては、横浜や神奈川などがあったようですが、その中でここ松江を選んだのは、アイルランド文化の関わり方の深さでした。これは、小泉八雲が松江にアイルランド文化を持ち込んだことが大きく関わっています。コロナパンデミックは相変わらず猛威を振るい、「巨人のシチューハウス」は不安定な経営を余儀なくされていますが、それを支えているのは、松江店を本拠とするオンラインショップの売り上げだそうです。

(のつともゆき)

編集後記

☆取材した内容を取捨選択し、それにあった写真を選択することを初めてやったので、難しいなと感じることが多かったですが、原稿を考えながら取材したときのことを思い出すことが多くあり、その時間がとても楽しかったです。日野原さん、貴重な取材をさせていただきありがとうございました。

(那)

☆自分で取材先を決めて、記事を作るのは難しかったですが頑張りました。お忙しい中、取材させていただいた三島さんありがとうございました。いろいろな話が聞けて楽しかったです。展示してあった作品はどれも素敵で、見ていてわくわくしました。次にいまみや工房を訪れるときにはピザを食べたいです。(田)

☆取材を通して、相手からどのような情報を引き出していくのが難しかったです。質問の仕方ひとつで答え方も変わってくるため、事前にもっと考えてくればよかったと反省しました。また、取材をする機会はなかなかないと思うため、貴重な経験になりました。

(川)

☆今回の記事を執筆するにあたって、私は未知ではあるがどこか親しみのある文化と、文化を背負い海を越えてはるばるやってきた尊敬するべき巨人に出会うことができました。彼は、吹き荒れるコロナの嵐の中を、柔軟な対応で乗り越えようとしています。私も、彼の店で食事をするなどして、彼を応援していこうと思います。

(智)

☆貴重な体験を、ありがとうございました。あたたかい場所でした。寒い季節が旬のいちごは、とてもおいしかったです。掲載にあたって写真を選んでいる時も、南さんの笑顔に、とてもあたたかい気持ちになりました。雨の音が響くビニールハウスも心地よかったです。今度は晴れた日にもお邪魔してみたいと思います。

(遼)

☆今回、「ひだまりのおと」を制作させていただいて、企画立案から取材、記事の編集まで自分で行うことがどれだけ大変かを学ぶことができました。自分の知らなかったことを聞いて、見て新しい世界を感じる事ができました。取材をご快諾して頂いた皆様、編集に関わってくださったすべての皆様、本当にありがとうございました！

(陽)

☆私は盲導犬のお話を小学生の時に聞いたきりで、それ以降あまり聞く機会がありませんでした。私自身が学びなおしたいと思い、お話を聞かせていただいたのですが、読んでくださった皆さんにも、これをきっかけに盲導犬のことをもっと知っていたら嬉しかったです。(愛)

☆難しい授業でしたが、仲間や先生方に助けていただき、やりがいを感じながら楽しく活動することができました。好きな米子さんの街の魅力が少しでも伝わるといいなという思いで、今回の記事を作成しました。米子の澄んだ青空をイメージして、全体的に青色に統一してまとめています。この記事を見て、一人でも多くの方が米子に興味を持ってくださったら嬉しいです。(巴)

☆今回は松江市国際交流員の崔美貞さんに取材をして来ました。終始なごやかに取材は進みました。崔さんの活躍をもっと色々な人に知ってもらいたいです！取材をお受けくださ

た松江市国際交流員の崔さん、松江市役所 国際観光課の方々ありがとうございました。そして、お手伝い頂いた先生、友達にも感謝です。(在)

☆『ひだまりのおと』第4号をお届けします。今回は巻頭に、岸本強副学長からご寄稿いただきました。松江キャンパスの「あゆみ」を、キャンパスを彩る植物とともにご紹介くださっています。本誌を片手にキャンパス内を歩いて見てもらえると嬉しいです。一方、今回の記事は学生制作分のみで構成できました。それぞれの個性が表れたレイアウトとともにお楽しみいただけましたら幸いです。(繁)

ひだまりのおと 第4号

2023年3月20日発行

編集 『ひだまりのおと』編集部

責任者 山根繁樹

E-mail : s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

総合文化学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

制作指導 小倉佳代子 日高正樹 山根繁樹



米子市 市街地